

考古学資料からみた琉球列島の頭髪関連道具

上原 静

Hair Ornaments in the Ryukyu Archipelago from Archaeological Materials

UEHARA, Shizuka

要 旨

本稿はグスク遺跡や近世古墓などから出土する頭髪具の実態の把握を目的とする。とくに櫛や簪、笄、毛抜の4種類を対象に、その形態や時間軸における変遷を整理し、中近世日本との比較から系譜について言及した。そして琉球近世の簪や髷の文化が、中国の明朝期を中心とする冊封政策の影響を受けていることと、その頭髪具の製作には中世日本の金工技術が背景にあることを考察した。

キーワード：簪、櫛、笄、毛抜、髪型、冊封体制

Abstract

This paper aims to grasp the actual state of the hair ornaments unearthed from Gusuku sites and early-modern tombs, especially four types of combs, *kanzashi* hairpins, *Kougai* hairpins, and tweezers, and to understand their forms and changes over time, as well as their genealogy in comparison with the Middle and Early Modern Japan. Moreover, it is discussed that the culture of hairpins and *mage* (topknot or chignon) in the Ryukyu Early Modern Period is influenced by tributary system of China, particularly during the Ming Dynasty, and that the production of these hair ornaments is backed by the medieval Japanese metalworking techniques.

Keywords: *kanzashi* hairpins, combs, *Kougai* hairpins, tweezers, hair style, tributary system of China

はじめに

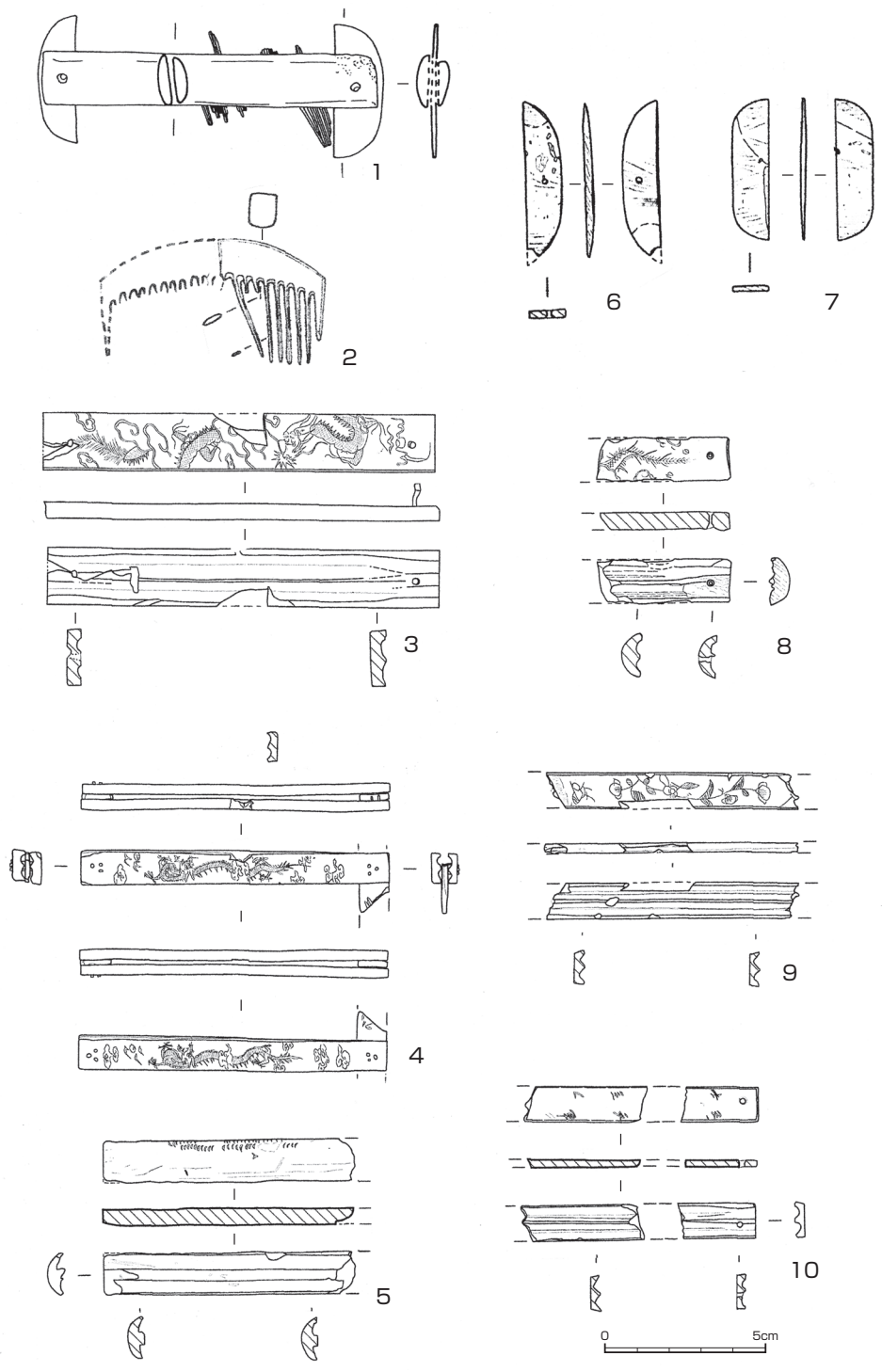
琉球列島におけるグスクや中近世の集落跡、寺跡、古墓などから、大きさが3～4 cm台のヘラの名を冠した小骨製品が出土する。手撫での光沢と、両端に刀子の様な刃が付くことから、筆者は2007年に資料集成（13遺跡、33点、2類型）を試み、近現代の裁縫ヘラに繋がる可能性を論じた^(註1)。しかし、13年後の2020年沖縄県立埋蔵文化財センターの教育普及紙（リーフレット）において、裁縫具ヘラ説を改め、梳き櫛の部品として新たな見解が提示された^(註2)。編集執筆者の玉城綾氏に照会をしたところ、骨製品分析のため同センターへ招聘された丸山真史氏（東海大学）によって指摘を受け、大分県大友氏館跡の出土製品を実見・検討した上で公表したとのことであった。この経緯により用途の謎が解け、自説の撤回となった。ただ、出土資料には、留金具（鉾）ないし小孔の痕跡が存在しないものや、逆に、斜行や斜格子状の線刻を施したものなどがあり、その在り方に疑問を残した。本稿の目的は当該課題に向けての復元的検討と、関連する頭髪道具類の様相を明らかにすることにある。

1. 検討対象資料

発掘資料に頭髪関連を検索すると簪、筭、毛抜が組成として挙げられる。また、他に未検出であるが、木・角製櫛（片刃櫛）や櫛払、くしとおし、剃刀、油壺、水皿などが想定される。さらに広げると鏡や鉢、耳かき、手箱などにもおよび、化粧具類や服飾具類、葬制の副葬品類など、中近世における生活文化の実態へと昇華されていく。ただ、現在の資料的環境はいずれも資料不足は否めず、当面前述の櫛、簪、筭、毛抜の4種類で検討を進めたい。

1) 櫛

櫛は髪の毛のもつれを整えたり、垢やほこりを取り去ったり、髪飾りに用いたりする道具である^(註3)。木製の堅櫛が北谷町伊礼原遺跡の縄文時代晩期層から発見された^(註4)。本州縄文文化と関わりがあるいわゆる装身具である。後続のうるま時代（弥生～平安時代並行期）以降、漸次骨製品から貝製品への転換の現象とともに、出土報告は減少^(註5)し、グスク時代、琉球王国時代の様相については不明という状態になる。ところが冒頭でもふれたが、2020年に些細なヘラ状骨製品が、長く不明であった整髪具文化に光を当てた。櫛は機能・用途により数種に分類され、確認できたのは、梳き櫛と称される主にダニやシラミ、フケやホコリを取るための専用櫛^(註6)である。全体の形が推定できる参考例として、14世紀後半から16世紀後半に営まれた大分県大友氏館跡の出土資料がある。第1図1が梳き櫛（両刃櫛）で、長さ10.2cm、幅1.6cmの棧（骨材）の間に、長さ4cm、厚さ0.1cmに満たない16本前後の竹製の箴（おさ）が残っ



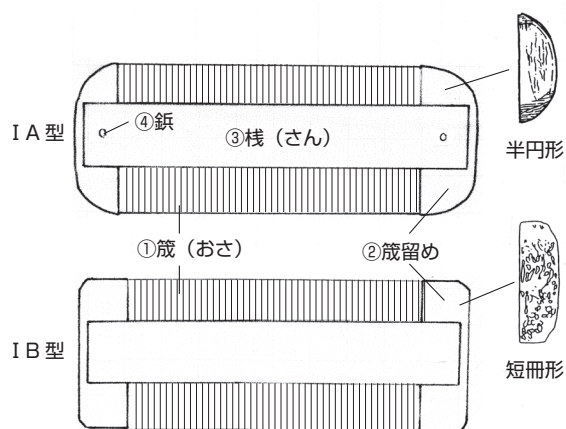
第1図 梳き櫛等図

1、2大分県大友館遺跡（梳き櫛と片櫛） 3～10那覇市首里城御内原東地区

ている。箄の両端には半月形の薄く削った骨製品（前述のへら状骨製）が配置され、極小の鉾で固定されている。同図2は整髪用の木製櫛で、背が湾曲した片刃櫛（唐櫛）である。全体の40%を残す。材質はイスノキで、箄の長さは3cm前後で、厚みはほぼ0.1cmである（註7）。

以上、発掘調査報告書から摘記したが、出土遺物の実見、観察から次の3点について改めて認識することができた。

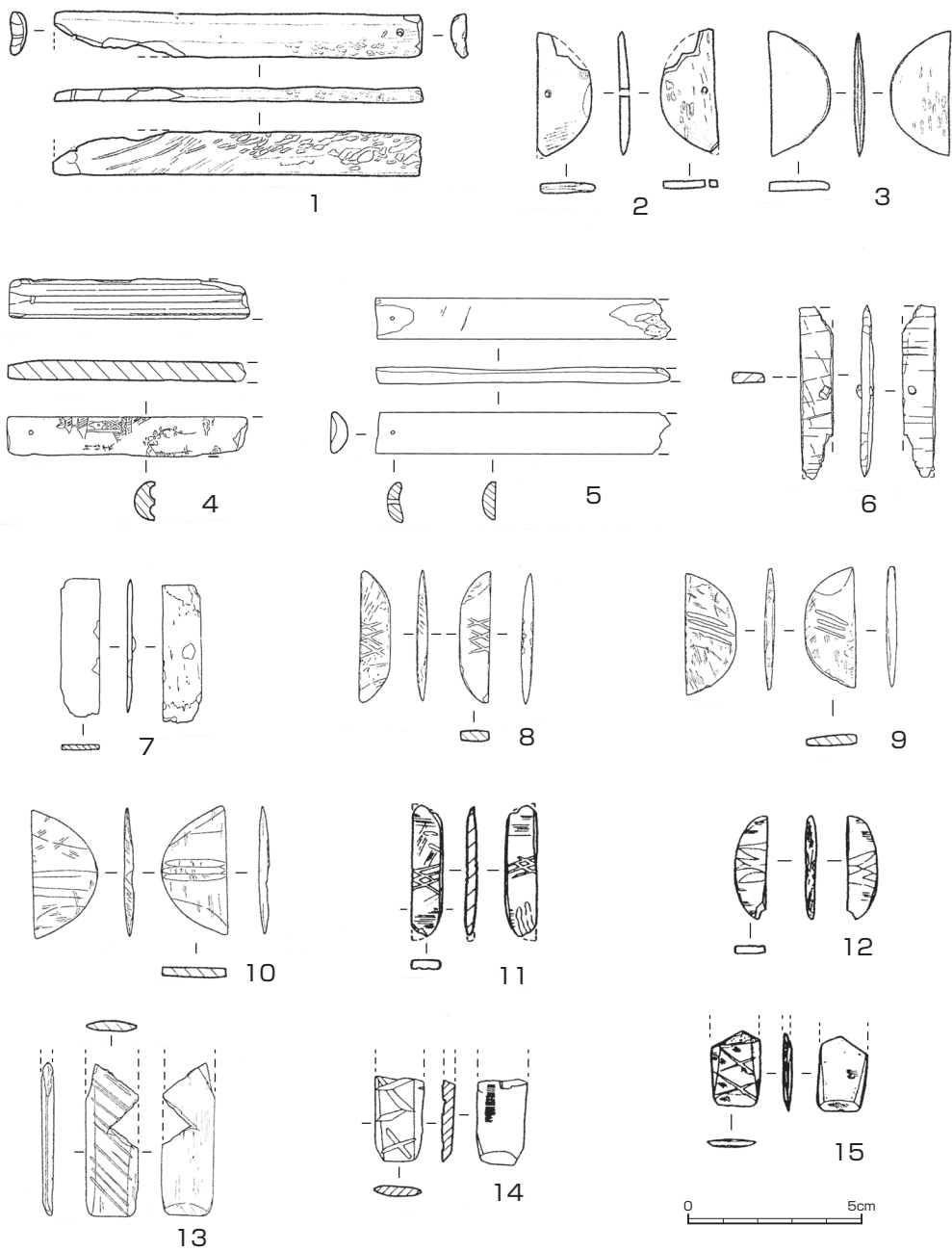
1つは第2図の模式図で、部位の名称で示すが、基本的には①両端が細く尖る竹板の箄（歯）と、②並んだ箄を左右両側から詰めて固定する一対の半円形（短冊形）骨製品と、さらに箄を表裏面（上下面）から挟み押さえる棒状の③棧の3つの部品から構成されている。沖縄県内の遺跡においては、①は完全に朽ち落ちて存在せず、②と③はバラバラに外れた状態で報告される。なお、②は



第2図 梳き櫛模式図

ウシ、ウマ骨を素材とし、長軸の両端は一樣に研磨が加えられ薄い板状に作られている。厚さは2～3mm、長さが約4cm、横幅1.1～1.5cmを呈している。管見で18遺跡、35余点を数え、琉球諸島に広く分布があり、グスク時代から近現代まで存在している。③の棧については、那覇市首里城跡で4件の地区（註8）、北谷町伊礼原D遺跡（註9）、那覇市渡地村跡（註10）、那覇市湧田古窯跡（註11）などで出土している。第1図3～10、第3図1、4、5に示すが、長さが9.5～12cmまでを計測し、大小みられる。竿の形状にも断面が四角形や半円形があり、また、棧の内面側の作りにも双溝をなすものと、そのまま平面のものがみられる。さらに、器表面に図柄の線刻画（龍文、草花文など）を施すものと無文様のものがあり、細工の細かさの観点ではみると、第1図3～5、8～10、第3図4は上等品で、同図1、5は中品（廉価品）の評価もできる。櫛の全体の形を復原すると、両端の部材の形状により、四隅が丸くなるものをIA型、他方四角形になるものをIB型として大別される。

次に2つ目は、前述の大夫氏館跡における両端の骨製品には、半円形タイプが用いられ、同形同大の一对にみえるが、子細には大きさが不揃いである。前述の③の特徴を含めて、櫛の個体にも品質のバリエーションが窺える。また、出土遺跡における櫛の個体数は勿論不明であるが、巨視的に骨製品が同形であれば、二枚一組という判断から、出土枚数を2で割り出し、およその個体数を算定することが可能である。



第3図 梳き櫛等図

1～3 北谷町伊礼原D遺跡 4、6、8～10、13那覇市渡地村跡
 5、7 那覇市首里城跡木曳門地区 11、12那覇市天界寺跡 14那覇市銘苅原南遺跡 15うるま市勝連城跡

3つ目は、②と③を繋ぎとめる方法である。出土資料は明らかに第2図④の鉾が遺存するものや、抜け落ちて孔（1～3点）を留めるものがあるが、逆に全く孔が存在しないものも存在する。この後者に関して、完成品に至らない未製品という組み立てキッド（使用者が自ら組み立てる部品セット）の存在を推測することもできるが、出土品には明らかに摩滅や手すりが見られ、一定の使用が進んでいることを窺わせるもので、現象上では説明が難しい。むしろ、鉾留のみと捉える接合方法を疑った方が自然とみている。中世日本の遺跡でも無孔品がみられる（第12図3）。第3図2、3、6、7の表面（一面）はおよそ骨特有の海綿体の多孔質面を消きらず、また、逆に第3図8～13のような斜行や格子状の刻みを付けたもの（表裏面）がある。櫛の部品上の配置をみると、棧と重なる部分に位置している。いわゆる多孔質面や刻み目は恣意的なもので、日本の工芸技術でもちいる接着方法の技法がおこなわれたと考えられる。つまり接合面の密着性を高めるための細工であり、表具、刀装具、木材細工などでみられる固定法である。なお接着材には続飯糊、正麩糊、漆、膠^(註12)があり、その特性と接合材により使い分けされているが、この検証には理化学的分析を待つしかない。

再び、今後は第3図13～15の先端と両側面に刃状の研磨と、先端まで刻みを入れた製品についての用途の解明である。上述した半円形骨製品類とは、明らかに形態および整形が異なる。現在未発見の櫛とおしか、払いなどの道具として憶測されるが確な根拠はない。当該資料については、引き続き単へう状骨製品として呼称し、接合資料の収集と類似品の捜索が必要である。

以上、些細な骨製品（部品）が、梳き櫛の存在を提示し、琉球の中近世をとおして長く不明であった頭髪具の一つを明らかにした。大きさが9～12cmで、I A、B類の2類型があり、高価品や廉価品という品質の違いも認識された。さらに本州の事例ではあるが、第1図2、第12図1、2のような純木製の片刃櫛（横櫛・唐櫛）や梳き櫛、同図5、6の櫛払いなどの存在から、一定程度の種類や量を推測することを可能ならしめている。

2) 簪

簪は髪型を保持するとともに、飾りとして髪に挿すものである^(註13)。その登場は前項の櫛と同様に縄文時代後期には出現している。ジュゴンやクジラ骨を素材にした先が細く尖る棒状製品で、頭は穿孔や抉りを施したものが多い^(註14)。縄文時代に継続するうま時代（弥生～平安並行時代）から出土が減少し、グスク時代に至っては推移不明となる。ただ、グスク時代の後半段階には、僅かに今帰仁城跡例^(註15)などに金属製の簪が確認されてはいる。琉球王権の成立段階になると、遺跡における簪の出土が著しく増加し、いわゆる琉球の簪の制に深く関わっていることが解される。

(1) 簪関連の研究小史

簪に関する研究は琉球服装史や髪結いに関わる風俗史（民俗学）、金属器研究における製作技術史、近現代の金細工職人に関する考現学などにみられる。本項では、簪の形式学的研究に焦点を当てているため、関連する研究内容を適記する。

近世代及びそれ以降に属する簪に関する研究は1960年代における嘉数津子の『琉球服装史』を嚆矢とする。1509年簪・帕の制を典拠に、士分と百姓を身分別に5種類の簪（第1表）挙げ、また、成人男女の髪型や男女児の通過儀礼にかかる結髪や、日本の月代との関係に言及した^(註16)。この研究がその後の叩き台となり、より位階や役目、性差による違いの解明へと進展している。1972年『沖縄文化史辞典』^(註17)で（第2表）、簪の種類を国王簪、世子簪などと階層による簪と、男女による簪、儀礼用簪など、都合12種類の簪を挙げ、形態や大きさについて解説している。この研究により琉球簪がほぼ出揃った観すらある。また、民俗学的視点で、1972年上江洲均は成人男女、男女児、神女の簪にもふれ、頭上での在り方について言及した^(註18)。また、1982年『琉球風俗絵図』^(註19)で、従前の研究ではみられなかった図像記録を提示した。簪の種類は10種で（第3表）で、とくに簪の形や大きさ、素材、頭上での指し方による違い（頭部の向き）が描写されている。また、明治12年の身分制廃止で髪型への規制はなくなるが、近世以来の簪や髪型は昭和まで存在したとした。その背景には明治政府の旧慣温存政策が強く影響を与えていた述べている。

地域史としての記録では、1979年、『那覇市史』那覇の民俗を執筆（第4表）した真栄平房敬は、那覇における簪の種類や特徴、使用者の使用事例を記述している^(註20)。さらに、1983年同氏は『沖縄大百科事典』の簪の項を担当し、1972年の『沖縄文化史辞典』に掲載された簪の種類を超える16種類の簪を解説した。記述上の大きな特徴としては成人男性と女性側の位階をより具体的に示しつつ、簪を示したところであった^(註21)。簪に関する研究も一旦落ち着いた状況がみられるが、2000年栗国恭子は神女簪の基礎的研究として、沖縄県内伝存する分布調査を実施し、14本の存在を明らかにした（第5表）。また、簪に関する文献研究から、神女簪の背景には王府としての規定がみられないことや、神女簪の構造や文様などの特徴を指摘し、さらに同簪の出現が16世紀中頃にあると論じた^(註22)。2010年には久保智康は沖縄県内の金工実態調査に参加し、その中から伝存品の簪や神女の簪の製作技術に日本本土の金工技術の影響が投影されていることを明らかにし、また、神女簪の系譜は中国明代の金冠に由来することを論じている。さらに、神女簪に施されている文様と形態の新旧を通して4つの技術系統をあげ、その内の数系統が16世紀に遡り、その後神女制に則って18世紀後半から19世紀前半に製作、配布された推移を考察した^(註23)。

以上、簪をめぐる研究が服飾研究から開始され、その後歴史、民俗、さらに政治的な位階や

第1表 簪と帕の種類

身分	名称	簪	帕
士分	王子	金花金茎	黄
	按司	” ”	黄
	三司官	” ”	黄
	親雲上	銀花金茎	赤
	里主・家来赤頭	銀	青緑
百姓	百姓	真鍮	白



簪の型式：左，獅 右，獅と鴛鴦

註：嘉数律子（1960年）『琉球服装史』より

註：沖縄県教育庁文化課（2008年）『沖縄の金工品関係調査報告書』より

第2表 簪の種類

①	国王簪	黄金向竜頭浮彫簪	竜は開口、閉口の2種。竿は10cm以上。
②	世子簪	牡丹花七分咲形黄金簪	直径約3.5cmの牡丹花。竿は10cm位。
③	王子按司簪	覆盆子型黄金簪	直径2cmの苺の周りに5mmの花弁。花の厚さ1cm。竿は7cm位。
④	三司官簪	”	按司簪と同じ。16世紀のものに黄金獅子頭型のものもある。
⑤	親方簪	花黄金簪	黄金花銀茎で、花は直径約1cmの荅形、花弁はない。
⑥	士族	水仙花型銀簪	親雲上以下諸士。茎は長短あり。
⑦	平民簪	水仙花型真鍮簪	真鍮簪。形や大きさは士族と同じ。
⑧	押差	男の副簪	首かき形、細長い六角菱の竿。先端六角錐。王子按司は金、親方以下諸士は銀、平民は真鍮。
⑨	王妃簪	鳳凰形の黄金簪	胴体部は翼をたたむ、尾羽は細長く、先端は六角稜。
⑩	女子簪	大礼簪	ナガミジューファー。カブはスプー形。全長30cm、六角稜。
⑪	側差	女の副簪	スバジャン。カブは耳かき形、全長10cm内外。聞得大君、王妃は黄金、王女以下は銀、下士以下はしない。
⑫	亀甲大簪	平民の大礼簪	カーミナケーजूファー。カブはスプー形、全長30cm、黒、茶褐色の2色。

註：かんざし（1972年）『沖縄文化史辞典』東京出版より

第3表 琉球風俗絵図にみられる簪

男性	金属製	金製		
		銀製		
		黄銅製		
男女児		銀製		
女性	金属製	金製	上等 士族	
		銀製	士族	
		黄銅製	平民（児）	
	木製	木製	士族・平民	
		動物	亀甲製	平民（礼服時）
		魚骨製	糸満平民等	

註：解説 上江洲均（1982年）『琉球風俗絵図』より

第4表 身分・男女別による簪の種類

位	男 簪	位	女 簪
国王	向竜頭黄金簪	王妃	鳳凰型黄金簪
世子	牡丹花形黄金簪	世子妃	黄金簪
王子	覆盆子型黄金簪	王子妃	〃
按司	〃	按司夫人	銀簪
三司官	〃	三司官室	〃
親方	苺苔型金花銀茎簪	親方室	〃
親雲上以下の諸士	水仙花型銀簪	諸士室	〃
百姓	水仙花型真鍮簪	百姓妻	木簪、べっ甲簪

註：真栄平房敬（1983年）『沖縄大百科辞典』沖縄タイムスより

第5表 近世文献にみる簪の制

王	黄金竜花簪
世子（成人前）	黄金竜花大簪
王子・按司（成人前）	銀大簪
成人世子・王子・按司・法司	黄金葵花簪
法司・紫巾官	金葵花銀茎簪
御鎖側官より群臣の子弟	水仙花銀簪
新参の子弟（未爵位前）	水仙花銅簪
聞得大君・王妃	黄金竜花大簪
公主（王の娘）	黄金簪
按司より群臣の婦女	銀大簪

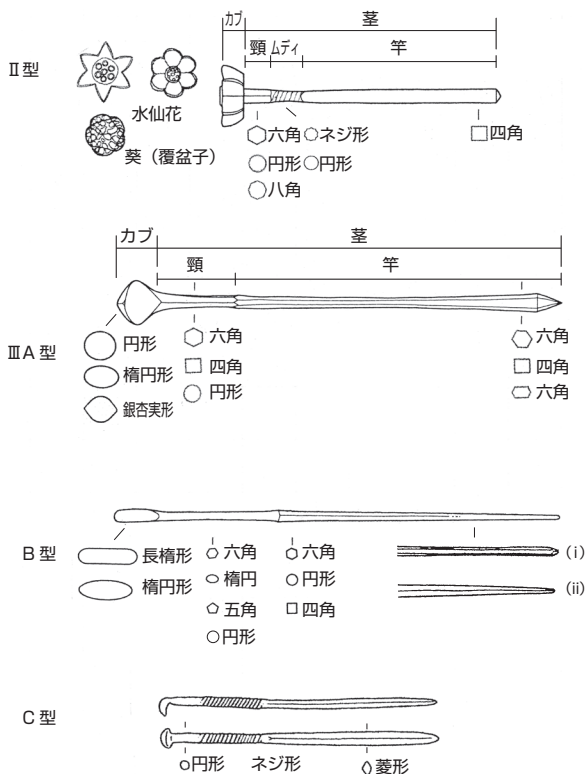
註：粟国恭子（2000年）金属文化の素描より

役職の差異にみる簪と、詳細な研究へと展開してきている。基本的には階層や身分性、また職制を意図した簪の意匠、形態、材質などの差異、さらに、簪の制度が成立して以降の消長が分かかってきた。考古学的には簪の型式化と編年、文献・民俗学研究による成果と如何に関係するのかを検討する課題がある。

(2) 簪の型式的特徴

簪はグスクや近世集落跡、古墓などにおけるの考古学的調査で多数確認されている。遺跡に関わる人々是一般士族層や平民層に属するもので、位階制に基づく服飾や副葬品を考える上で貴重な資料となる。他方、王府の中心層や直接関与した支配者層など簪は、極めて量が僅少で、旧家やノロ関連者など伝製品になるものであった。いずれにしても考古学資料を、既存（周知）の枠組みのなかで俯瞰する必要から、改めて大小の分類を試みた。

先行研究により琉球の簪



第4図 簪の部位名称と特徴

は、位階、性差、年齢など全ての人に関わり、記録研究でも明確に特徴（差異）が示されている。しかし、実態として、平民層のみならず士族層（有力者層）も多く関わる遺跡にも拘わらず、青銅製・真鍮製の簪が多数を占め、制度の規定との乖離がある。また、成人男女の副簪は、押差、側差と呼びを分けられているが、明確な基準が提示されてはいない。形態がほぼ類似するため、使用者から一旦離れ時間を経ると、その帰属（男女）を明確にし難いところが認められる。このような課題も内包していることから、簪の頭や茎、大きさなどにも注目した。観察部位を第4図に模式図で示した。

琉球簪は発掘出土品に伝存品を含めて体系的に捉えると以下の5類型となる。

I型（聖獣・鳥等形）：頭部分に龍や鳥などの動物の意匠を施すもの。

II型（花形）：頭部に一輪の花をかたどるもの。

III型（匙形・耳かき形）：頭部の意匠に大小の匙形や耳かき形を施すもの。

IV型（二股式簪）：頭部は棒ないし板状で、竿の部分が二股に分かれるもの。

V型（神女簪）：頭部が傘型（半球体）となるもの。

I型（聖獣・鳥形）

I型は頭部分に龍、獅子、鳥などの意匠を施す（8頁上段右図）。基本的に形態は一本の茎に、彫像された頭がつくもので、金、銀の鍍金がなされたもの。旧家や所有した関係者に伝存する限られた資料類で、沖縄県教育委員会による金工品関係資料調査^(註24)から、その存在が確認され、現段階で計6点報告されている。

II型（花形）

本類の花形は伝存するものが僅かにあり、その大多数が発掘調査資料からなる。花形は六角花形、星形、水仙花形、葵、覆盆子と称される。その形態から4種類に細分される。

a：牡丹花七分咲形。直径約3.5cmのやや球形の大花。牡丹花。

b：六弁形の花で、花弁がおよそ三角状に尖る。水仙花形。

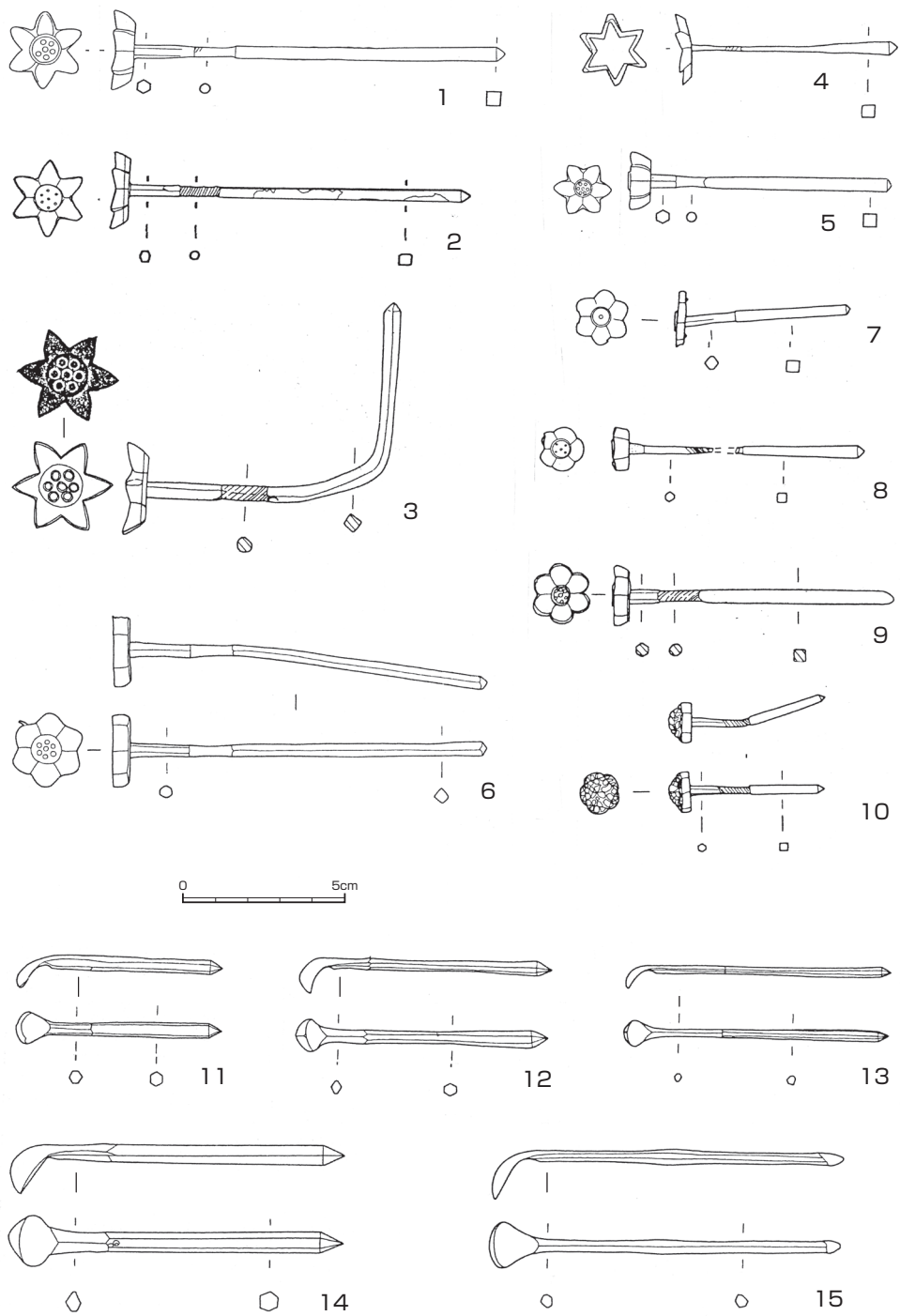
c：六（五）弁形の花で、花弁先が丸みを有するもの。

d：六弁形で内側に三巴を中心に多数の雲気様を彫るもの。葵（覆盆子）。

II aは伝存品で、『沖縄文化史事典』^(註25)に詳細な記述がみられる1点。

他のII b～II dは考古学的出土資料として計130余点を数え、概して花形の大きさは2cm前後を呈する。第4図上段図。

II bは第5図1～5で、類頭は金属板を上面と側面を作り、地板（底面）を瀧付けする。打ち出す花弁や花芯に鮮明なもの、無文のもの、平板な単純化したものまで、細工状のバリエー



第5図 簪

1、4、6、11那覇市銘苅古墓 2那覇市中城御殿跡 3首里城管理用道路地区 5、14浦添市前田経塚近世墓
7、8、10、12、13、15那覇市ナーチュー毛一古墓 9首里城管理用道路地区

ションがある。IIcは同図7～9である。II dは殆どみられないが同図10にあたる。

頭部につながる莖は頸、ムディ、竿の3つの部位が基本にあるが、例外的にムディが省かれたものもある(同図7)。3つの部位を横断形で示す。第4図II型。頸は六角形、円形、八角形タイプの3種類があり、ムディは捩れが入るものと入らず円形を呈する2種類、竿については四角形で先端が角錐に統一されている。以上の三つの部位の組み合わせで、主流となるのが、頭+六角形+捩り形+四角形のタイプで、それ以外は極めて僅少である。大きさについては、最小で4.8cm、最長で12.5cmを計測し、量的には10～12cm内ものに集中している。重さは5～10g未満が多く認められた。

III型(匙形・耳かき形など)

頭部(カブ)が匙型を呈するものである。発掘調査報告による出土数は130点で完全形は95点であった。材質は銅や真鍮を中心としている。第4図III A～Cで掲示した。

・III A型(匙形)

頭が匙状の形態をなすものである。全体形としては、匙状の頭は円形、楕円形、銀杏の実形(以下銀杏形とする)の3種類認められる。頭の大きさについては、頭の長さが2cm大から1cm大の範囲のものである。竿の厚みと形で、i.竿の先端まで一定か、僅かに厚くなるものと、ii.先端側に向かいそりながら厚くなるもの。i、iiとも先端のみが尖る。長さについては、全長は最小約4.8cm、最長約20cmと大きさのバリエーションがある。民俗学研究成果から、成人女性のみならず男女児の使用があるが、それを分ける基準規格も示されていない。作業仮説として10cmを超えるものをa類、逆に短いものをb類と2類に大別しておく。

a類：長さが10cmから約20cmの範囲にあるもの。第5図14～15、第6図1～4。

茎の形状について、5種類を確認し、類型の傾向をおさえることができた。

イ：頸と竿の断面形が六角形。

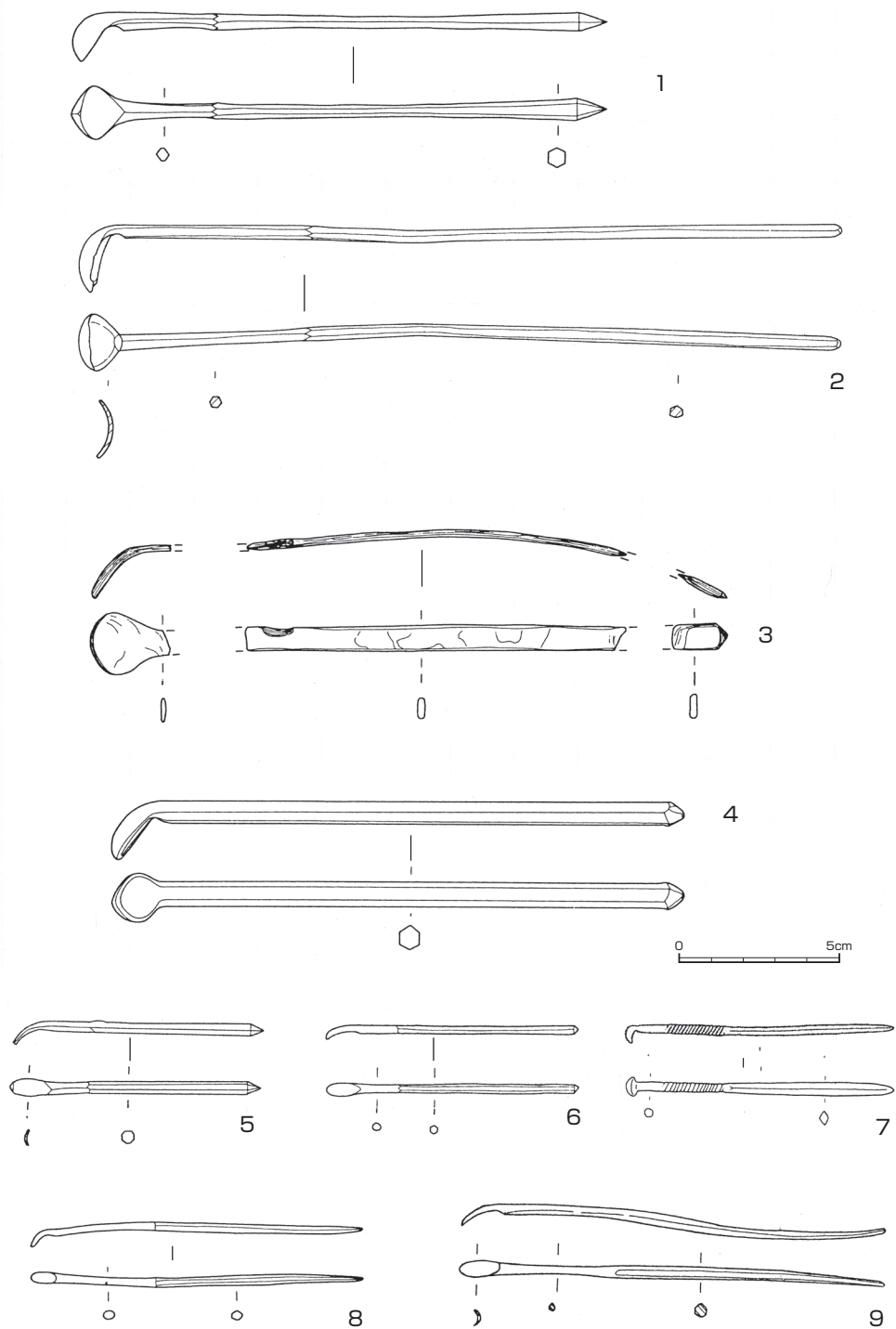
ロ：頸と竿の断面形が四角形。

ハ：頸の断面が六角形で、竿が六角扁平。

ニ：頸の断面が円形で、竿が六角形。

ホ：頸の断面が楕円形で、竿が六角形。

出土数では、イが最も多く一般的形状として認識される。その点でロ以下は1～2点の状況である。材質と重量については、金属製は5g未満から35g未満までみられるが、5～20gが大半を占めている。第6図4ガラス製品で、長さ17.9cmで23.3gと重い。同図3木製で破損はしているが、残存分目で14cmを測る。



第6図 簪

1、3、4、8那覇市ナーチャー毛ー古墓 2久米島町ヤッチノガマ・カンジン原古墓 5浦添市前田経塚近世墓
6那覇市銘苅古墓 7伊是名村古島遺跡 9首里城管理用道路地区

b類：5cmから9.9cmの範囲のもの。小形品である。第5図11～13。

出土量的には、5cm未満がわずかに3%認められ、他5～9.9cmが97%となる。

茎についてみると、頸と竿部の断面形はともに六角形が多く、僅かに頸が円形、四角、略方形、竿部が六角の他に円形、四角、略方形がみられた。重量については、金属製5gに僅かに満たないものから10gをやや超えるものまでであるが、5～10g未満のものに集中する。Ⅱ型は頭部が匙型で、大きさ（長さ）で、a、b類に大別したが、基本的には竿の頸及び竿の断面が六角形を呈したものを主体としたものであった。

・ⅢB型（耳かき形）

頭部（カブ）が扁平で細長く耳かき様の形をとる簪である。耳かき形状は巨視的に長楕円形と横幅のある楕円形があり、長いものでは約2.5cmを測るものまでである。また、竿の形態は2種みられ、i.竿の作りがほぼ一定の径で、先端部のみで尖る、前ⅢA類のジューファータタイプと同じ形態のものと、ii.竿の作りが金属針のように先端まで細く尖るものがある。

本類型は男性では押差、女性では側差と称され、性差による区分の基準は明確にはされていない、本項ではおよそ髪差を基準に、長さが11cm以上の長いものa類と、11cmを超えない短いものb類として扱った。

a類：長さが11.5cmから最長19cmのものまで確認される。第6図9、7図6。

短いものである意味で切れ目がないバリエーションがあるが、任意に3グループ分けを試みた。結果は①11.1～14cmが30%、②14.1～16cmが34%、③16.1～18cmが8%と、相対的に②、①の順に多く存在した。また、茎の形状については、第4図（Ⅲ型）の模式図で、頭が略長方形と長楕円形があり、竿は首と竿の2つ部位からなる。その断面形では以下の4種類が認められた。

イ：頸が円形、竿が六角形。

ロ：頸が楕円形、竿が六角形。

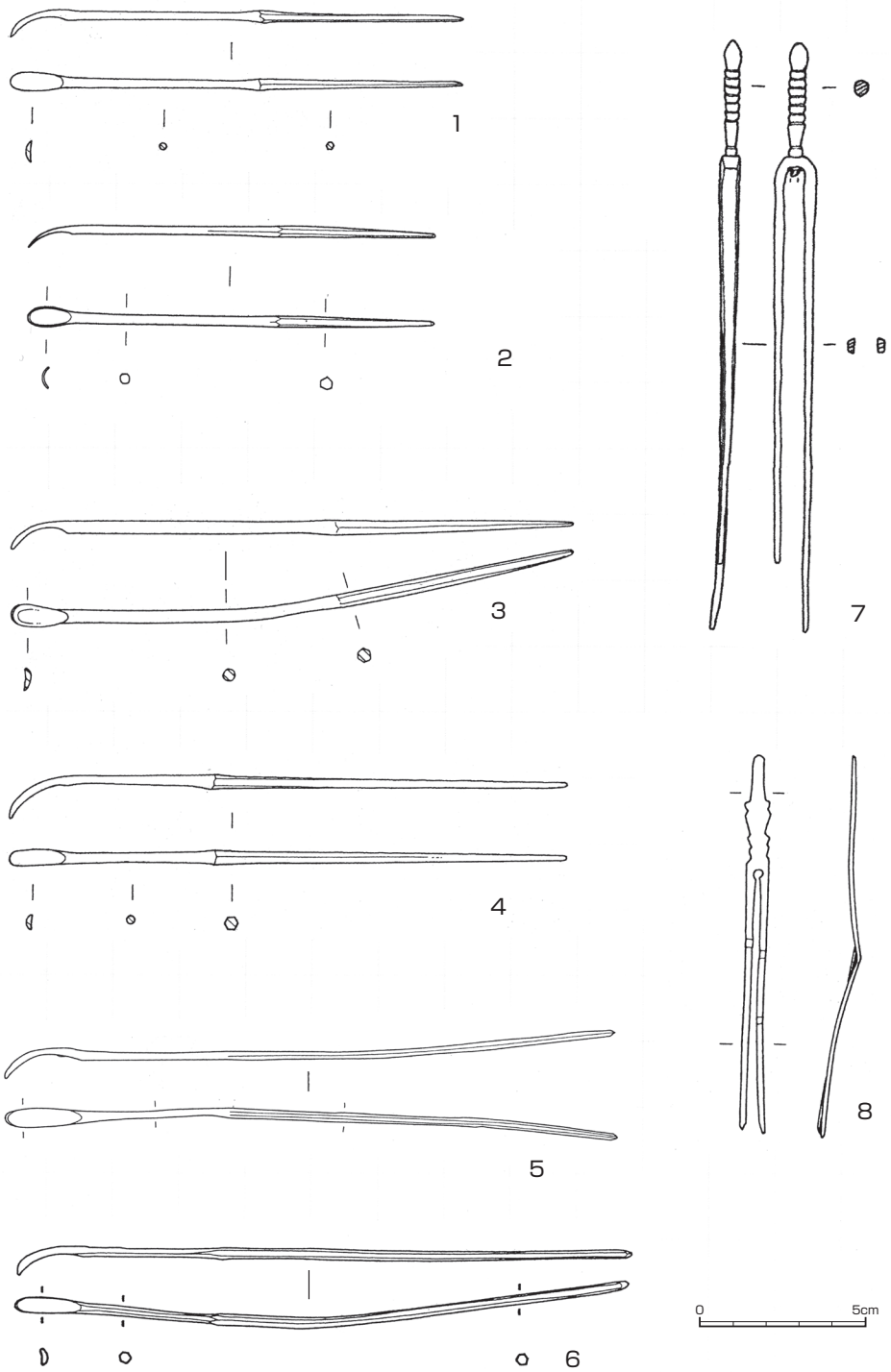
ハ：頸が五角形、竿が六角形。

ニ：頸が六角形、竿が六角形。

出土量ではイが81%、ロ16%、ハ2%、ニ1%と、イの円形+六角形のタイプが最も多く、形態的に近いロが続いている。重さについて5g未満が多い傾向にある。

b類：11cm以下のもの。第6図5～8。

小形のもので、①6～8cm、②8.1～11cmに細分を試みた。出土量としては①は3%、②が25%の比率である。茎の断面形では3種類の組み合わせが認められた。以下のイ～ロ類の3種



第7图 簪

1、4 与那国町嘉田地区古墓 2 勢理客城門原古墓 3 首里城管理用道路地区 5 浦添市前田経塚近世墓
 6 那霸市中城御殿跡 7 今帰仁城跡 8 那霸市天界寺跡

に大別される。

イ：頸が円形、竿が六角形。

ロ：頸が楕円形、竿が四角形。

ハ：頸が六角形、竿が六角形。

茎の形状としてはイが多く、重さは5g以下である。

ⅢB類の耳かき型は、大きさでa、b類に大別され、両者ともに頸が円形、竿が六角形を呈するものが多く、また、頸が長いものは先端が針状に細く尖る(ii)ものに傾向として認められた。

・ⅢC型（小匙形）

頭部が1cm以下の小さい匙形で、頸はムディ、竿は扁平の菱形を呈する（第6図7）。頭部はジプファーのⅢA型で、茎はおよそ髪差のⅡb型との技法を合わせた様な形をなす。身の長さは約8.3cmで小形である。同形態資料が伊是名村伊是名古島遺跡^(註26)、久米島町ヤッチのガマ^(註27)、那覇市中城御殿跡^(註28)、那覇市首里城跡（御内原地区）^(註29)で確認されていて、伊是名島や久米島にも広がり、一つの型式とみなされる。

Ⅳ型（二股式簪）

竿の部分が2本になる二股式簪である。第7図7は今帰仁村今帰仁城跡^(註30)、同図8は那覇市天界寺跡^(註31)の出土で、件数は極めて僅少である。他に伝存品として、沖永良部島、奄美大島において確認されている^(註32)。中世日本に類例を検索すると、第12図4の大府府境環濠都市遺跡^(註33)例がみられる。今帰仁城跡に比較すると、頭分部の耳かき（貝の内）部分の形状で、日本本州の簪には耳かきが付されるのは多くみられる。同図8は竿分部が欠落するが、頭部分の耳かき部分とその下の玉が付いたもので、いわゆる玉簪と称される和簪である。

Ⅴ型（神女簪）

考古学資料として出土例はみられず、いずれも祭祀関連家に伝わる伝存品である。文様の種類、配置、加工技術、材質などの点から、久保智康は4類型に分け、その所有ノロの系統や年代について、16世紀中頃から18世紀後半ないし19世紀前半までの製作、配布を想定^(註34)している。以下に摘記する。

A類：龍・鳳凰文。

B類：牡丹唐草文第1グループ（写実的花薬）

C類：牡丹唐草文第2グループ（円形花薬）

D類：牡丹唐草文第3グループ（瓶形花薬）

以上、発掘調査資料を中心に伝存品を加えて、琉球列島における簪の形態的様相をみた。簪の種類は形態上、大分類5種、中分類6種、小分類で23種に細分された。ことに出土品の多いⅡ型ではBb、Bc類が占め、頭の花の鍛造にあつたては、花卉や花芯の魚子の打ち出しなど彫りの丁寧なものから、花芯のない無文なもの、さらには輪郭だけの平盤なものまであり、形式的に簡略化で変化している。また、ⅢA型は頭が円形、楕円形、銀杏形で、頸と竿の長さの比率が1対3～5のものである。竿は先端に向かいほぼ同径をなすものと、漸次太くなる形状がみられ、ことに銀杏形との組み合わせが多い。時期的にも新しい傾向が窺える。ⅢA型には大きさの点から男女児に属するものが多いとみている。

ⅢB型の耳かき形は、前述のⅡ型に比べ、頸が竿に比べ長いもので、頸対竿の比率が1対1～3で、極端に頸が竿の長さを遥かに長くしたものもある。A類の頸が円形、竿が六角形で長い傾向にあるもの、B類は頸、竿の両方円形で、短いものが多く、また、頸と竿の比率では、1対5と頸の長さも短いものが認められる。民俗事例では長手ものが男性の副簪、対して短めのが女性の側差で紹介はされていることなどから、作業仮説で分類案をあげた。

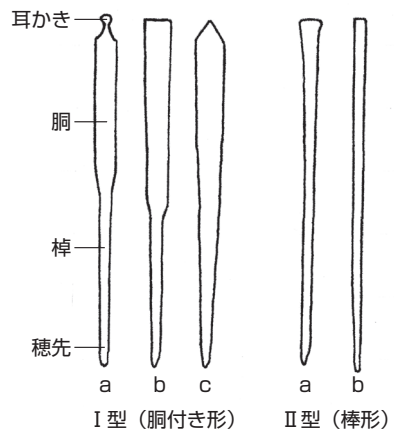
なお素材からみると、主に伝存品では金、銀、銅製品にべつ甲製品があり、発掘資料では金属製（銅、真鍮、アルミニウム、錫、ジュラルミン）、動物骨製品、木製品、ガラス製が認められ、都合11種類となる。素材からは動物骨製品が上限になり、最盛期の下限が金属のアルミ製品等となろう。

最後に形態の類例は、Ⅰ型、Ⅴ型は具象的な造形から中国要素があり、Ⅱ、Ⅲ型は耳かき形やⅣ型の二股簪は中世日本に多くもとめることができる。

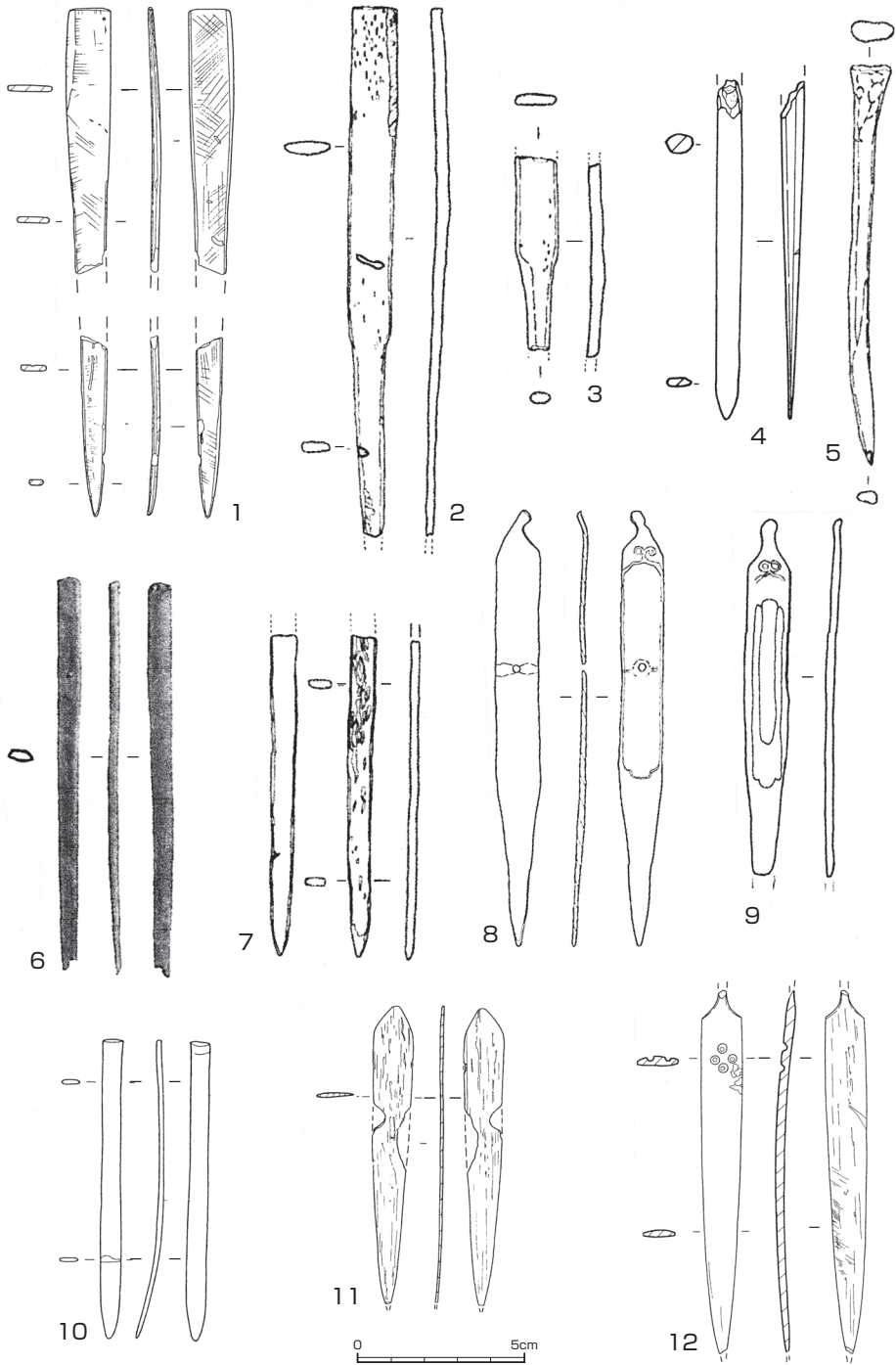
3) 簪（こうがい）

簪は髪を掻き分け整髪をし、髪を巻き付けてまとめるためのものである^(註35)。琉球における簪の発見は南城市糸数城跡の報告を嚆矢とする^(註36)。その後、漸次資料は追加されているが、出土数量に課題があり、未だ資料の蓄積を待つ段階にある。现阶段で6遺跡、14点余確認されている。素材は骨製品、木製品、金属製品の3種類。形態的には細いへら状のⅠ型と、細い棒状もⅡ型に大別される（第8図）。

Ⅰ型（竿胴付き形）第9図1～3、8、9、11、12。



第8図 簪模式図



第9図 筈

- 1、(骨製) 那覇市首里城淑順門地区 2、3、5 (骨製) 南城市糸数城跡 6 (木製)、
 11、12 (骨製) 那覇市渡地村跡 4 (骨製) 那覇市円覚寺跡 8 (銅製) 名護市宇茂佐古遺跡
 9 (銅製) 南城市島添大里 10 (銅製) 那覇市天界寺跡

本類型は幅の細いへら形を呈し、およそ上部が扁平(胴)で、下部(竿)に向かい細く、先端(穂先)が尖る。上端部は、a. 耳かきを付けるもの(同図8、9、12)、b. 平坦面になるもの(同図1、2)、c. 山形に作るもの(同図11)がある。I型には金属製品と骨製品がみられ、金属製品は同図8の名護市宇茂佐古島遺跡^(註37)、9の南城市島添大里グスク^(註38)出土品で、両者ともに耳かき形(貝の内)、胴部の木瓜形意匠およびその上端に眉形と称される刻み文様などがあり、日本刀の拵^(註39)にある筭そのものである。骨製品は前者の金属製品の特徴である外形や頭分部などに類似する。製作上における影響が窺われる。なお、中世日本の骨製品にも類例が多く、例えば第12図9、10は耳かきの付くものや、胴部が11~13のように扁平をなすものがある。なお、意匠面で胴部に凹線や丸文様を施す同図12、13の中で、凹線を施すものは現在沖縄では確認されていないが、これも金属製の木瓜形意匠の変容形とみている。いずれにしても丸文様は第9図12に認められ、流通品の存在も考えられる。

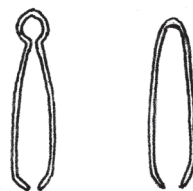
II型(竿棒形) 第9図4~7、10。

この類型はa. 細く長い動物骨や、b. 扁平の筭状をなすもので、素材の様子を大きく留める製品である。a類は第8図5の長管骨を利用した製品で、同図6は細い棒状の木製品(杉材)である。ことに木製品の出土は極めて希な事例で、出土遺跡の那覇市渡地村跡^(註40)では15世紀後半代の年代観が得られている。また、琉球列島では同図5の南城市糸数城跡^(註41)、那覇市渡地村跡^(註42)、那覇市円覚寺跡^(註43)から出土している。

骨製筭は中世日本の事例も多く、例えば広島県草戸千軒町遺跡(第12図9、10、12~14)^(註44)、大阪府境環濠都市遺跡(第12図11)^(註45)において認められる。この状況は琉球独自の自然骨利用に始まるものと、明らかにI型に示す中世日本流通品やそれを模したものがあり、首里城跡内では淑順門地区^(註46)と京ノ内地区^(註47)であるが、とくに淑順門地区では14世紀後半から16世紀前半に属することが報告されている。

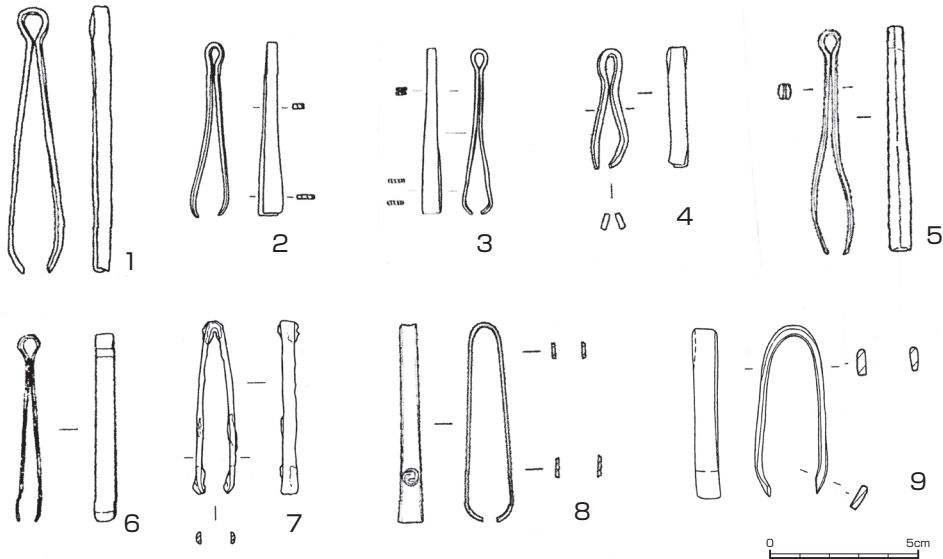
4) 毛抜

頭髮(白髪)や髭、鼻毛、生え際などの体毛を抜く道具である^(註48)。琉球列島における毛抜の出土例は、1966年の北中城村ヒニ城調査報告^(註49)からである。資料数が僅少のため、まとまった研究は行われてない。現時点で7遺跡10点を数える。出土遺跡の性格はグスク、集落跡、寺跡、近世館跡、古墓などがあり、グスク時代から近現代まで連綿と続いている。また、地理上で沖縄本島の今帰仁城跡^(註50)、名護市宇茂佐古島遺跡^(註51)、恩納村山田グスク^(註52)、那覇市天界寺跡^(註53)、那覇市首里城跡^(註54)、那覇市中城御殿跡^(註55)、宮古島



I型(8の字形) II型(Uの字形)

第10図 毛抜模式図



第11図 毛抜

1 恩納村山田グスク 2 名護市宇茂佐古島遺跡 3 今帰仁城跡 4、7 那覇市天界寺跡
5 那覇市首里城跡書院・鎖之間地区 6 宮古島上方古墓 8 首里城跡御内原東地区 9 那覇市中城御殿跡

市宮国元島上方古墓^(註56)、与那国町嘉田地区古墓群^(註57)などと沖縄本島から南の宮古島までの広く存在している。

毛抜の構造は、一本の細く薄い金属をピンセット状に折り曲げ、さらに両先端部を内傾させて、細かいものを捕まえやすい造形を呈している。形態的には第10図のI型（8の字形）と、II型（U字形）の2タイプに大別できる。

I型（8の字形）

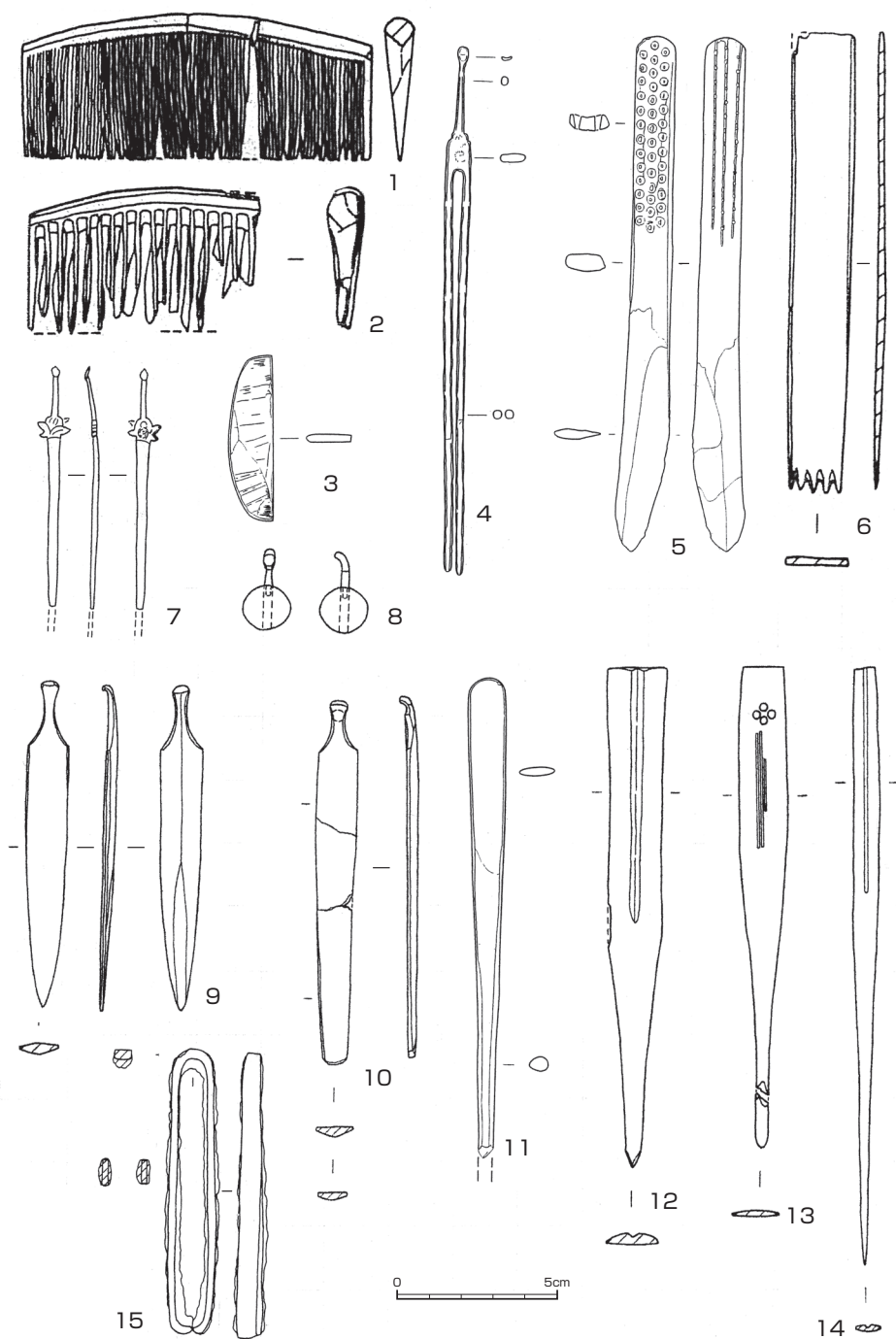
第11図1～6に示した上端の折り曲げ部分に小さい輪があり、全体観が8の字形を呈する。大きなもので長軸約9cm、小さいもので長軸約4cmを測る。

II型（U字形）：同図7～9。

上端部が折り曲げられただけで、全体の形がU字形を呈したものである。大きなもので約5.8cm、小さいもので4.5cm。

I、II型ともに側面幅はほぼ一定か、端部（先端）に向かいバチ形状に広がるものに限られ、逆の細くなるものは認められない。


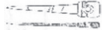



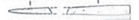








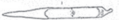




両型式間の新旧関係では、I型が早く、II型が後続する状況が傾向としておさえられる。類例を日本本土に求めると、I型は管見では見いだせてないが、II型に関しては、滋賀県夏見城遺跡において、16世紀半ばに位置づけられる長さ約8cmの真鍮製の製品が出土している（註58）。また、中世の長野県窪河原遺跡^(註59)や、広島県草戸千軒町遺跡（12図15）^(註60)からも9



第12図 日本中世遺跡出土製品

- 1 梳き櫛 (木製)、2 横櫛 (木製) 広島県草戸千軒町遺跡、3 梳き櫛 (骨製)、4 簪 (銅製) 大阪府堺環濠都市遺跡
 5 櫛払 (骨製) 大阪府堺環濠都市遺跡、6 櫛払 (木製) 広島県草戸千軒町遺跡、7 簪 (銅製)、
 8 簪 (骨製) 広島県草戸千軒町遺跡、9、10、12~14 簪 (骨製) 広島県草戸千軒町遺跡、
 11 簪 (骨製) 大阪府堺環濠都市遺跡、15 毛抜 (銅製) 広島県草戸千軒町遺跡

第6表 頭髪具の組成と推移

		櫛	簪	笄	毛抜	その他関連遺物
先史時代	3000前年	堅櫛 (木製) ヤエヤマコクタン 	骨製簪 (骨製) ジュゴン、サカナ、カメ骨製 			
	8c					
グスク時代	10c					10c 中国銅鏡 素文鏡
	14c	梳櫛 I A型 【朝貢開始】 	和簪  琉球簪 二股式簪 	笄 I 型 [骨製]  笄 II 型 [木製] 	毛抜 I 型 	八稜鏡 指輪
	16c	梳櫛 I B型 	神獣頭簪 	[金属製] 	毛抜 II 型 	
琉球王国時代	17c	【簪の制】	神女簪 【金・銀・銅・真鍮・木製】  率 			和銅鏡 湖州鏡 種鉄 天下一銘鏡 和鉄
	18c	【女官御双紙】	 魚骨製 			方鏡
近現代	19c後	【廃藩置県】	↓ ↓ ↓	↓	↓	↓ 鏡指輪
	20c		[ガラス製] [アルミニウム製] [銅、ジュラルミン製]	↓	↓	

～10cmのやや大形ものが出土している。

なお、北中城村ヒニ城^(註61)の出土品は、外観がⅡ型に類似する。しかし、頭部から先端までが直線的で、前記の資料群と異なり先端部で内側への折曲げ認められない。長さが約11.8cmと概して長い。当面は毛抜から分けて、類例を待って再検討したい類型である。また、第10図9は報告書では裁縫道具の糸抜きと紹介されている。他のものに比べややU字部が開きぎみであるが、用途の判定には資料が絶対的に不足しているため、これは本項では毛抜として扱う。

3. 琉球列島における頭髪具類の組成

頭髪道具を時間軸で組成と推移を検討した(第6表)。琉球列島における櫛と簪の消長からみると、縄文時代後期段階に登場する。これらを装身具の類型にすると本州の縄文文化に見いだされる。その後の、うるま時代以降は減少し、いわば社会の骨素材にたいする需要度の低下現象が装身具文化にも影響を及ぼしているかのようにある。グスク時代にいたっては益々様相

が不明で、やっと当時代の後半段階14世紀代から中世日本の梳き櫛、笄、毛抜など腐食に強い骨製品と銅製品が出現し、また、銅鏡も検出され頭髮具類の組成が周辺地域との活発な交流、交易が背景にあることが認識される。

15世紀の王権の成立する段階になり、身分統制を意図した冠の制度（1509年）が実施されるが、考古学資料の簪の増加が古記録を実証している。明治時代に以降からガラス製品やアルミ製品など新素材とともにプラスチック製製の櫛も加わり、第二次世界大戦後にほぼ歴史の表舞台から降り、ごく限られた一部の人々の範囲で命脈を保っている状況にある。

また、整髪櫛や簪が考古学資料として出土していない時代（期間）が鮮明になった。

簪の場合はグスク時代前半段階であり、整髪櫛はグスク時代から王府時代の長期間である。梳き櫛の発見は腐食に耐えた骨材が存在にあった訳で、その他の例えば整髪櫛が未出土状態として続いているのは、存在していなかったということではなく、材質の性格ために遺存していない期間を語っていると考えられる。日本中世遺跡で木製簪や櫛の出土例があり、物流の盛んな中世において、結髪のある社会に整髪櫛が存在しないというのは逆に考え難い。来る琉球王府の進める金属素材を中心とする「簪の制」を浸透させる背景が、自然素材を用いた骨製品や木製品にあつたのではないかと推測させる。

4. おわりに

以上、沖縄諸島における遺跡出土の梳き櫛、簪、笄、毛抜類などの頭髮具を組成という観点から集成を試みた。確認された点について簡単にふれてまとめとする。

考古学的に確認されていた微細な骨製品は、両歯の梳き櫛の一部で、復原形態が隅円長方形と長方形の2種類が推定された。また、線刻文様（絵）が施され、部材の整形にも精巧なものも存在し、優品や中品の流通製品として相対的な位置づけが窺えた。とくに優品は首里城跡、渡地村跡に認められ、遺跡の性格にも関連している。

発掘資料にみる簪は一本笄簪と、二股式簪が認められた。前者は出土資料の9割方で琉球簪の基本形をなしている。材質の点では、出土遺跡の4割を占める位階が反映された古墓からも、殆ど青銅製か真鍮製からなり、銀製が数点という状況であった。実態と簪制度との間に乖離が認められる。日常、非日常の使い分けがあつたのか、あるいは何らかの葬制上の都合があつたことであろうか、疑問が残る。また、成人男女の副簪、また児の簪の種分けに関しても、厳格性は見いだしがたく、大きさや形状による緩い基準で区別している部分も認められる。

二股式簪とともに、簪の頭（カブ）や後述の笄にも耳かきの造形も日本中世に類似性が多く認められ、琉球簪の造作に日本からの影響を考えることができる。

笄は、骨製品が素材に使われることもあり、グスク時代以来から登場していることが明らか

である。類型的に細い棒状製品Ⅰ型と、胴付きのⅡ型があり、ことに後者には中世日本の骨製筥や金属製筥と近似したものがあり、前者筥と同様の製作技術上の影響と判断される。

毛抜は文字通り体毛を摘まむ単純な造形ではあるが、形態的に2種類存在することを確認できた。出現はグスク時代にあり、近現代と連綿と続いている。琉球列島では両者ともに5～6cm台のものにたいし、中世日本の遺跡ではⅡ類型のみの報告で、大(10cm前後)小のバリエーションが認められ、偏在の特徴が認められる。編年的にはⅠ型がⅡ型に先行する。

以上、琉球列島における頭髮具の特徴を記したが、髪型とどの様にリンクしているかもふれておきたい。まず琉球人の髪型に関しては、先行研究により基本的なイメージがなされ、とくに男性は「かたかしら」、女性は「からじ」と称される結束になっている。また、近世後半代では女性の髪型はバリエーションあることも認識されている^(註62)。これらを踏まえ琉球周辺地域を瞥見すると、日本、朝鮮半島(李朝)、中国(明朝)と地域固有の結髪文化が広がっている。そして政治、社会的活動の中心にいる男性の簪利用からみると、各特徴^(註63)があるものの明朝時代の中国、朝鮮、琉球などになっている。取り分け当該地域を代表する国王も玉簪を使用し、儀式においては朝衣も伴うもので、冊封関係のシンボルとなっている。明朝からの簪の制度の導入は、まさに国内の政治的体制の統一のためであったが、アジア圏における明朝の覇権を反映させるものでもあったと考えられる。簪文化の展開は明朝への帰属を琉球国あげて体現していたともいえ、また一方でそれを支え特有な形で発展させたのは、冊封圏外にあった他ならぬ日本の金工技術や工芸技術であったことも解ってきた。

謝辞

執筆にあたっては玉城綾氏(沖縄県立埋蔵文化財センター)、後藤一重氏(大分県立埋蔵文化財センター)に大変世話になりました。また、資料収集において奥平大貴氏(沖縄県立埋蔵文化財センター)、大城一成氏(糸満市教育委員会)の協力を得た、あらためてお礼を申し上げます。

参考文献

- 註1. 上原 静「琉球列島出土の有孔円盤製品、骨製筥等について」『南島考古』多和田真淳先生生誕百年記念特集号 第26号 沖縄考古学会 2007年
- 註2. 一枚のリーフレットに簡潔かつ、かみ砕いて解説されている。ただ、惜しむらくは図ないし写真など画像がみられなかった。玉城 綾「Vol・39 ヘラ状骨製品の正体‘梳き櫛の部品’」『沖縄県立埋蔵文化財センター発行の普及紙』2020年3月
- 註3. 橋本澄子「櫛」65頁『世界大百科事典』8 平凡社 1988年
- 註4. 北谷町教育委員会『伊礼原遺跡』伊礼原B遺跡ほか発掘調査 2007年

- 註5. 盛本 勲「奄美・沖縄諸島の骨角牙製品」『考古資料大観』貝塚後期文化第12巻 2004年
- 註6. 横田富佐子「櫛」406頁『日本大百科全書』7 小学館 1986年
フリー百科辞典 ウィキペディア「大銀杏」2022年11月6日
- 註7. 大分市教育委員会『大友氏館跡2』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書144 2017年
大分県立埋蔵文化財センター『豊後府内8』中世大友府内町跡第34・43次調査地区 一般国道10号
古国道府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 2008年
- 註8. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡』下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・
木曳門跡発掘調査報告書 2001年
沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡』御内原北地区発掘調査報告書Ⅰ 2010年
沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡』御内原東地区発掘調査報告書 2017年
沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡』銭蔵地区発掘調査報告書 2015年
- 註9. 註4掲載文献に同じ。
- 註10. 那覇市教育委員会『渡地村跡』臨港道路那覇1号線整備事業に伴う緊急調査 2012年
- 註11. 沖縄県教育委員会『湧田古窯跡』Ⅳ 県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査 1999年
- 註12. 畑 敏雄「接着材」388頁『旺文社百科事典エポカ』10 1983年
フリー百科辞典 ウィキペディア「接着材」2022年11月6日
- 註13. 橋本澄子「簪」595頁『世界大百科事典』6 平凡社 1988年
- 註14. 久貝弥嗣「貝塚時代骨製品の出土状況」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』2014年
- 註15. 今帰仁村教育委員会『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』1991年
- 註16. 嘉数津子『琉球服装史』デザインセンター 1960年
- 註17. 真栄田義見・三隅治雄・源武雄編『沖縄文化史辞典』琉球政府文化財保護委員会監修東京堂出版
1972年
- 註18. 上江洲均「ノロの簪」『沖縄の暮らしと民具』慶友社 1972年
- 註19. 上江洲均：解説『琉球風俗絵図』宝玲叢刊第五集 本邦書籍株式会社 1982年
- 註20. 真栄平房敬「衣」『那覇市史』那覇の民俗 1979年
- 註21. 真栄平房敬「簪」「簪の制」『沖縄大百科事典』上巻 沖縄タイムス 1983年
- 註22. 粟国恭子「金属文化の素描～神女の簪について(1)」『首里城研究』第5号 2000年
- 註23. 久保智康『日本の美術 琉球の金工』第533号 2010年
- 註24. 沖縄県教育庁文化課編集『沖縄の金工品関係資料調査報告書』2008年
- 註25. 註17掲載文献に同じ。
- 註26. 伊是名村教育委員会『伊是名元島遺跡』2000年
- 註27. 沖縄県立埋蔵文化財センター『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群』2001年
- 註28. 沖縄県立埋蔵文化財センター『中城御殿跡』(首里高校内) 櫛園跡 首里高校校舎改築に伴う発掘調

査報告書2 2021年

- 註29. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡』御内原地区発掘調査報告書 2006年
- 註30. 註15掲載文献に同じ。
- 註31. 那覇市教育委員会『天界寺跡』首里城線街路事業に伴う緊急発掘調査 1999年
- 註32. 沖縄県教育庁文化課編集『沖縄の金工品関係資料調査報告書』2008年
- 註33. 大阪府文化財センター『境環濠都市遺跡I』（SKT959地点）2008年
- 註34. 註23掲載文献に同じ。
- 註35. 橋本澄子「筭」275頁『世界大百科事典』9 平凡社 1988年
- 註36. 玉城村教育委員会『糸数城跡』1991年
- 註37. 名護市教育委員会『宇茂佐古島遺跡』1992年
- 註38. 南城市教育委員会『島添大里グスク』2011年
- 註39. 笹間良彦『図録 日本甲冑武具事典』柏書房 1981年
- 註40. 沖縄県立埋蔵文化財センター『渡地村跡』臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告 2007年
- 註41. 註36掲載文献に同じ。
- 註42. 註40掲載論文に同じ。
- 註43. 沖縄県立埋蔵文化財センター『円覚寺跡』2 2014年
- 註44. 広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡発掘調査報告I』北部地域北半分の調査 1993年
広島考古学研究会『草戸千軒町遺跡発掘調査報告II』北部地域南半分の調査 1994年
- 註45. 大阪府文化財センター『境環濠都市遺跡I』（skt959地点）2008年
- 註46. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡』淑順門西地区・奉神門埋蔵地区発掘調査報告書 2013年
- 註47. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡』京の内地区発掘調査IV 2012年
- 註48. 徳村 薫「毛抜」676頁『世界大百科事典』8 平凡社 1988年
- 註49. 嵩元政秀「ヒニ城の調査報告」『1966年版 琉球文化財調査報告書』琉球政府文化財保護委員会
1966年
- 註50. 註15掲載文献に同じ。
- 註51. 註37掲載文献に同じ。
- 註52. 恩納村教育委員会『山田グスク』遺構確認調査報告書 2013年
- 註53. 那覇市教育委員会『天界寺跡』首里城公園整備事業に伴う緊急掘調査報告 2000年
- 註54. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡』書院・鎖之間地区発掘調査報告書 2005年
沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡』『首里城跡』御内原東地区発掘調査報告書 2017年
沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡』継世門周辺地区発掘調査報告書 2002年
- 註55. 註28掲載文献に同じ。
- 註56. 沖縄県立埋蔵文化財センター『宮国元島上方古墓群』2013年

- 註57. 沖縄県立埋蔵文化財センター『与那国町嘉田地区古墓群』一嘉田地区ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書 2004年
- 註58. 堀真人 記者発表資料「夏見城（なつみじょう）遺跡出土の毛抜について」財団法人滋賀県文化財保護協会 2007年8月10日
- 註59. 日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター『更埴条里遺跡・屋代遺跡郡』2000年
- 註60. 註44掲載文献に同じ。
- 註61. 註49掲載文献に同じ。
- 註62. 『郷土のくらしと文化一図説一』上巻 新星図書出版 1980年
- ・真栄平房敬「髪型」『沖縄大百科事典』上巻 沖縄タイムス 1983年
 - ・日本の伝統工芸12 九州II・沖縄 1985年
 - ・辻合喜代太郎・橋本千栄子『琉球服装の研究』関西衣生活研究会 1991年
 - ・古波蔵ひろみ編集・監修大城学『きからじの世界』1995年
 - ・ラヴ・オーシュリ/上原正稔 照屋善彦監修『青い目がみた大琉球』2000年
 - ・今村治華『ジューファアの記憶』沖縄の簪と職人たち 南方新社 2022年
 - ・宮城弘樹・安座間奈緒「沖縄の古墓から出土した結髪資料」『南島文化』第45号 沖縄国際大学南島文化研究所 2022年
- 註63. 明朝は簪(一本)に冠の組み合わせ。朝鮮は簪(一本)または網巾との併用。琉球は簪を二本を使用する。